
ISで、変な男子を一人増やしてみた。

ポチ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ISで、変な男子を一人増やしてみた。

【Nコード】

N1321Z

【作者名】

ポチ

【あらすじ】

世界で唯一ISを使える男、織斑一夏。

彼が発見されたことにより、世界中でISを動かせる男性が他に存在するか、テストが行われた。

そして、発見されたのはまたもや日本。しかも織斑一夏の幼馴染みであった。

しかし、彼の性格は少々変わっていて……。

第一話

「ふぁ……っ」

カーテンの隙間から微かに漏れる朝日を感じると、アクビをしなから体を伸ばし、意識を起こす。

『世界初の男性IS操縦者』。その肩書きの所為で外に出れば注目を浴び、連日精神的な疲労がのし掛かってくるが、今日は惰眠を貪っているワケにはいかない。千冬姉が帰ってきてるから、朝食を用意しないといけないからな。

リビングに行くと、千冬姉が既に起きてテレビを見ていた。

……見ているのだが、様子が変だ。ヘアースタイルも服装もバツチリ決まっている。メイクだって、千冬姉の整った顔立ちを引き出すための薄い化粧で良く似合っている。しかし、千冬姉。悪霊すら殺さんとするその鋭すぎる眼光は、一体どうしたんだ？

『——てえ！』

不意に聞こえた、聞き覚えのある声。それは千冬姉の視線の先、テレビから聞こえた様な気がするのだが……気のせい、だよな？

『待てっつつってんだろ、このボケジジイ！』

いやいや、気のせいだって。俺の男友達第一号の声がテレビから流れてくるなんて——あ、すいません。嘘です。千冬姉の眼光が、鬼すら逃げるんじゃないかって程上がりました。間違いなくアイツです。

『誰が誰を人体実験に使うって？ 人体の秘密が知りたきや、先ずはテメエの体から調べやがれッ！ 今ならサービスで俺が頭蓋骨がち割って、脳みそ引きずり出してやるよ！』

『ひ、ひい！ これ、もつと速く走らんか！』

『そんなコト、言う、なら、自分で、走ってくださいよ！ 投げ捨て、ますよ！？』

画面には、頭髪が寂しくなった白衣を着た老人に、老人を背負って走っている三十代くらいのスーツを着た男性が映っていた。

——あ、この人達俺の所にも来た科学者だ。なんでまた、アイツにも俺と同じ実験なんて話を？ あれか、人体実験が流行ってるのか。日本人のモラルはそこまで低下したのか、嘆かわしい。

『骨髓を、ブチまけろー！』

またもや物騒なコトを叫んだ。その声の主は、俺が通っている中学校の制服に身を包んでいる。更に白いニット帽を深く被っていて、顔は鼻から上が見えなかった。そして、その手には——。

「金属、バット……」

間違いなく、俺の初めての友達であり、幼稚園からの腐れ縁の姿がそこに在った。

「目立つなと言っただろう、あの馬鹿者……」

「千冬姉、何でアイツがテレビに？」

「字も読めんのか、お前は」

仏すら救いの手を差し伸べずに逃げてしまいそんな怒気を纏って

いる千冬姉に、勇気を持って話しかけると、バツサリと切り捨てられた。痛い、痛いよ。

しかし、その指先は答えを示すかの様にテレビの画面を指している。えつと……？

『またもや日本で発見！ ISを動かした男子中学生！』

そんなテロップが右上の方に出ていた。ついでに、生中継の文字も。

これ生放送だったのか。カメラマンの人も走ってるんだろうに画面が全然ブレないのは、機械の凄さか、カメラマンの卓越したテクニックか。うーむ、奥深い。あ、カメラマン転けた。

『あ、映像が終わってしまいましたね。』

——しかし、いくらISを動かせる二人目の男性とはいえ、人体実験を迫る人が居るとは。さすがに見過ごせませんね』

『そうですねえ。あの子は絶対美形です。あんな可愛い子を、実験と称してあんな目やこんな目に——』

——ブツッ。

良く見かける男性アナウンサーの問いに、これまた良く見かけるIS解説者の女性がトンでもない答えを返した瞬間、電源が切れた。切ったのはもちろん千冬姉。

「まあそう言うワケだ。どんな因果か知らないが、奴——おれ晶も選ばれた。良かったな、仲間が出来たぞ」

そう言って千冬姉は立ち上がり、

「もう出る。晶の面倒を見に行かなければならん。朝食はいい。――すまん、一夏」

颯爽と、家を出ていった。

「――以上です」

結局、あの日テレビで見てから晶には会えず。強制入学となったIS学園の教室にも、晶の姿は無かった。幕も居るから、幼馴染み三人一緒のクラスが良かったんだけどな。

「あ、あのー、もうちょっとですね……うう」

無事自己紹介をやりきったと思って回想なんてしてたら、眼鏡の女性教師、山田先生が涙声混じりで何か言っている。はて、何かおかしかったろうか？

「――もっと詳しく話せ、織斑。自己紹介も出来ん男に育てた覚えは無いッ」

その言葉と共に、強烈な痛みが脳天から足先に走り抜けた。ぐぬぬ、この痛みはこの声……何故、何故貴方がここに！？

「ち、千冬姉……？」

「今は学校だ。織斑先生と呼べ」

ありがたいお言葉と共に、ありがたい一撃をまた貰った。……千冬姉、IS学園の教師だったのか。別に隠さなくてもよかっただろ、仕事に分からなくて心配したぞ……千冬^{ばか}姉。

「生徒諸君、私は織斑千冬だ。色々と言いたいコトがあるが、その前に自己紹介をしていない最後の一人を済ませてしまっ」

え、まだ居たっけ？

女子を終わらせてから、男子、俺に順番が回ってきたから、もう居ないハズだろ。公式戦無敗の元日本代表の千冬姉を見て騒いでた女子も、？マークを頭に浮かべている。

「^{むつれきあきら}村崎晶」

「はい」

間延びした気の抜けた声。怒った時とのギャップが凄まじいその声は、間違はなく晶のモノ。しかし、姿は見えない。くっ、一体どこに――？

「いちか、後ろだよ」

トントンと背後から肩を叩かれた。

……俺の席は教卓前の最前列。前にも横にも居なければ、居るのは後ろしかないだろ。馬鹿か、俺は。

いや、待てよ。それでも、俺の後ろの席は男子が座っていただろ
うか。……違う。女子だったハズだ。スカート姿のショートカット
が似合っていた――まさか！？

トテトテと歩いて皆の前に出る、“女子の制服を着た人物”。女子にしては体格が良いが、一般的な男子よりかは細いだらう。中性

的な凛とした顔立ちは、ショートカットも合わさってボーイッシュな魅力を引き出している。

と言うか――。

「初めまして、村崎晶です」

その外見とは正反対に、ほにゃつとした柔らかい雰囲気醸し出す“男子”。探し人の晶がそこに居た。何故か、女装して……。

第二話

「そこに居る織斑一夏に、窓際の席の篠ノ之箒さんとは幼馴染みです。恥ずかしながら人見知りしてしまうので、積極的に話しかけてくれたら嬉しいです。これからよろしくお願いします」

頭を下げて一礼。……反応がないなあ。

周囲を見渡すと、何故か皆ポカンとした表情。おかしいな。いかと違って、名前だけなんて自己紹介はしてないけど……。

「村崎、女子の制服を着てるのは何故だ」

えっと、千冬さん。出席簿をとりあえず下ろしてください。出席簿は殴るためにある物ではないのだよ。

「学園側から支給されたのがコレでした」

「事務のミスか……。学園には連絡しなかったのか？ お前も女物は着たくなかったろう」

頭を抱える千冬さん。たぶん千冬さんの頭の中には、兎の耳を着けた女性が思い浮かんでいるのだろう。僕も同じ考えです。天下のIS学園が、世にも珍しい男子生徒の制服を間違えるなんてあり得ないと思う。でも、今回はあの人に感謝してる。まさか女子用の制服に、こんな使い道があったなんて。

「そりゃ、好んで女装なんてしたくありませんよ。」

——でもですね、この服装には利点があったんです」

「利点てなんだ？ あと久し振り」

ふっふっふ。よくぞ訊いてくれたいちかくん。あと少し振りだね。力強く握り拳を作り、一個人ではなく教室全体を見渡す。あくまでも視線を合わせないのがコツだ。女子と視線を合わせるのは、気恥ずかしい。年頃の男子ですから。

「男子の制服を着ていると、さっきのいちかくんが見たいに女子の視線に晒されてしまう。それは人見知りする自分にとって、かなり辛いコトだ。

けどね。最初から女装してれば僕が男子だってバレない。これは目立たない為の最高の手段だったのだよ！」

「んなワケないだろ！ 例え似合っても、女装する方が恥ずかしいよな普通！？」

「――？」

「何でそこで首を傾げる！？」

クラスの半数の人達が、ずっこけたり机に突っ伏してくれた。ノリの良い人が多いみたいだ。

いちかくん。僕、君が何を言っているのかよく分からないよお！？

「演説紛いに言うコトじゃない。織斑も騒ぐな。

この通り、変わった奴だが人柄は悪くない。よろしくしてやってくれ。

――山田先生。男子の制服の予備を村崎に渡して、着替えさせてください。私はその間に、生徒達に自己紹介を済ませておきますから」

「――あつ。はい。分かりました。行きましょう、村崎くん」

脳天に響く一撃を貰い、呻く僕といちかく。

僕の手を引いて教室から出る山田先生だけど、意外と力あるんで

すね、山田先生。

コツコツ、と無人の廊下に二人分の足音が響く。

私に着いてくるのは、世界で二人目のISを動かせる男子、村崎晶くん。

まさか私が副担任を受け持つクラスに、本当に居るとは思わなかった。出席簿には名前が載ってたけど、男子の姿は織斑くんしか見えなかったから。それがまさか、織斑くんの後ろの席に女装して座ってるなんて。

普通は男子が女装してたら気づくだろう、と言われると思う。けど、今回ばかりは私は責められないだろう。

——だって、だって。この子、顔だけ見たら女の子でもおかしくありませんよ！？ 眉毛が少し濃いかな、とか。二重でキリッとした大きな眼だな、とか。それくらいしか男子らしさを見つけられませんよ。雰囲気も話さなければ落ち着いてる風に感じるし、大人っぽいです。

ズボンを穿けば男子に見えるだろうし、スカートを穿けば女子に見える。そんな感じがします。

うう、女性として負けた気がする……——ただ。
チロツ、とメートル程下がっている村崎くんをこっそり見ると、

「どうしました？」

此方を見ていた彼と、バッチリ目が合ってしまった。うわわ、どうしよう？

「な、なんでもありません。ホントに村崎くんが、バットで人を殴ろうとしたあの危険な人と同一人物なのかなー、とか思ってます

よ！？ 映像だとニット帽で顔を隠してたから分からないとかそんなんじゃないです——はっ……」

し、しまった。つい本音が。生徒に向かって危険な人とか言うてはいけないコトを……。

教師、失格です……。

「ああ。先生も見てたんですね、恥ずかしいな」

自己嫌悪で心が押し潰されそうな私とは逆に、恥ずかしさを隠す為か笑いながら話を続ける村崎くん。

「あの学者達、人のコトを実験動物か何かと勘違いしてて。断つたら断つたで家族がどうなってもいいのか、って脅してきて。ついプチキレちゃって。

でも、その前日。僕がISを動かした日に、千冬さ——じゃなくて。織斑先生に、あまり目立つ様な行動はするなって言われたので、顔を隠して追い駆けたんですよ」

「そう、だったんですか」

その話を聞いて、彼の表情を見て思う。彼は、村崎くんは。織斑先生の言っていた通り、優しい人なんだと。家族思いの、普通の男の子なんだと。

——今からでも遅くはない。村崎くんに謝らないと。

あれ？ でも、顔を隠しただけで、テレビにはバッチリ映って目立ってた……。

「学者達をボコボコにした後、織斑先生に一撃貰いましたけど。やっぱり、金属バットはやりすぎだったのかな？」

うん、村崎くん。やっぱり君は人とズレてますね。

着替え終わって教室に戻ると、授業開始時間ギリギリだったので、大人しく席に着く。

一時間目の授業内容はISの基礎理論だった為、何とか着いていた。入学前に渡された参考書を読んでなければ、基礎理論ですら意味が分からなかったんじゃないか。そう思う。

そして訪れる、初めての休み時間。でも、休み時間なのに全然休めなさそうだ。

その理由は、教室の内から、更には外からも降り注ぐ、女子の好奇の視線。

この視線を相手にするのはかなりキツイが、話しかけるのは苦手だから待つ。ひたすら待つ。

いちかに話しかけようにも、彼には話しかけてくる幼馴染みがいるから。その娘の性格を考えると、話しかけるかは五分五分だけど、その娘に譲ってあげなくちゃ。久し振りの再開、だからね。

お、来た来た。

「一夏……」

「箒」

おー、箒ちゃん。よく頑張りました。

引越す前の箒ちゃんは、いちかのコトを好きだけど素直になれない男子小学生みたいだったからな。いちかが話しかけてくるのを待ってて結局一日が終わり、何故アイツは此方に来ないんだッ!? なんて展開まで考えてた。

「一夏、だよな」

「ああ、そうだよ。久し振りだな箒」

「織斑一夏、で合ってるんだよね？」

「そうだって。どうしたんだ、箒……？」

つて、あれ？ 箒ちゃんの様子が何処かおかしい。何だか信じられないモノを見たような、そんな感じた。

いちかの顔は此方から見えないけど、同じく変だと思ってるみたいだ。

「ああ、そうだ。一夏だ。変わってない、一夏だ。だとすると本当に——」

つい、と視線が此方に向けられる。

箒ちゃん、久し振りだねー。なんて、笑顔で手を振ると。

「あ、ああ、あきき、ららら？」

箒ちゃんが斬新な呼び方で呼んできた。DJみたいだ。やるな、箒ちゃん。

「ちょ、落ち着け箒。晶、張り合わなくていいからな」

む。同じ様に返そうと思ったのに。考えを読むなんて、いちかのクセに生意気だぞ！

「……一夏。私の記憶の中では、大人しく、前に出てこない優しい少年が、村崎晶と言う人物だったハズだが……」

「そうだよな。昔の晶はそんな感じだった。大人しくて、物静かで、顔も中性的で、女子と間違えるヤツも多かった。

あの日、束さんに会うまでは……——」

ちよ、おーい。二人とも話に夢中になって、話しかけても気づかないよ。

その後、剣道の大会がなんやかんやらと話した末に、箒ちゃんは自分の席に戻っていった。

去り際に僕を見て、『あの人の犠牲者が増えたなんて……くっ』。なんて、よく分からないコトを言ってたっけ。

第三話

ふ、ふふふ。

二時間目の授業中。教室に響くのは、山田先生の可愛らしい声と、カリカリと鉛筆だかシャープペンシルだか分からないが筆を走らせる音。

そんな中。焦って焦って焦り過ぎて、顔に変な笑顔が浮かぶのを必死に抑える。ヤバい。なんとか着いていけるけど、ギリギリアウトっぱい。……自習しなきゃ。

授業が進んでいくと、いちかが挙動不審な行動を起こし始めた。隣の席の女子をチラチラと見ていると思ったら、今度は凝視。

いちか。いくら周りが女の子ばかりだからって、その、あの、それはどうかと……。

「な、なにかな？」

「ゴメン。何でもないんだ」

ほら気づかれちゃった。ここはやっぱり僕が注意しなきゃ。

「どうしました、織斑くん。何か分からないところがありましたか？」

「えっと、その」

いざ、と思ったら、山田先生が出てきてしまった。いや、もしかしたら山田先生も気づいて？

「分からなかったら、訊いてくださいね。私は頼れる先生なんです

から」

えっへん、と胸を張る山田先生。ダメだ、気づいてないよ。
——でも、一つ気づいた。山田先生、胸でけー。うん、しょうがないよね。そこに視線が行くのは。いちかみたいじゃなくて、相手が見せてきたんだ。しょうがないよね。

「先生、全部分かりません！」

うん、そうだね。全部分からないね——何ですと？

「ぜ、全部……ですか。」

織斑くん以外で分らない人は居ますか？ 村崎くんは……？
「厳しいですけど、何とか着いていってると思います」

山田先生の問いに反応を示した人数は、ゼロ、零、まる。そうだよね。皆進んでIS学園に来たんだ。最初の授業で躓くワケがない。その後、いちかが参考書を間違って捨てたのがバレて、織斑先生にまたもや出席簿チョップを貰っていた。その上あの分厚い参考書を、一週間で読破しなければならなくなったのには、いちか。自業自得とは言え、同情するよ。

更に、いちかの『俺、自分からここに来たんじゃないしー。やつてらんねー』と言う考えを、織斑先生がずばり当てて説教したのは、さすがブラコンだと思います。

「村崎、何かよからぬコトを考えたか？」

「織斑先生のコトはいつも考えてます。嫁の貰い手が見つかるのか、不安でしょうがない」

「いやそれは俺の役目だろ」

ズドン、ズドン——！

お、おお……。ヤバい。威力が桁違いだ。

「……え、えっと。大丈夫ですよ、織斑くん。放課後一緒に勉強しましょう。だから、頑張つて。ね？」

「は……はい。よろしく、おねがいします」

呻くいちかの頭を撫でる山田先生。

年上の女性に撫でられるなんて。むう、羨ましいかも。

「放課後、異性と二人きり……。えへっ。ダメですよ。年下の男の子に手を出すなんて。」

あつ、でもでも。先生、強引にされると弱いんですよ……。それに私、男の人初めて——」

僕、痴女つて初めて見た。

両腕で自分を抱き締め、クネクネと動く頬を赤く染めた山田先生。腕で胸を拘束してるから、胸の形が凄いエロい。ぜ、ぜひと動画にげふんげふん。

さすがにそれはいけないよね。いかなんて前かがげふんげふん。

「で、でも織斑くんなら。でもでも、村崎くんも変わってるけど良いかも」

「んん！ 山田先生、授業はどうしました？」

「——す、すいません。直ぐに続きを！」

織斑先生の怒気混じりの笑顔で、漸く正気に戻った山田先生。

……この学園、大丈夫なんだろうか。千冬さんに山田先生つて、教師として性格に問題があると思う。

そんなこんなで授業は終わり、今は休み時間。

さつきは篝ちゃんに譲ったけど、今度は僕の番だ。山田先生の胸
と言い、おっぱいと言い、乳房は良い。こんなエロまみれな全ての
元凶は、いちかに有る！

「いちか」

「お、おう。どうした」

ドヨンと暗い雰囲気撒き散らすいちか。授業内容が全然分から
なかったのは、結構堪えてるみたいだ。でもね、いちか。今回は手
加減してあげられないんだ。

「授業中、隣の席の、えーと……女子を見てたよね」

話しに上がったのが気になったのか、その女子が此方を見ている。
名前、なんだっけ。なんて訊けないな。

「おう」

自らに間違いは無いとでも言いたいのか。即答してきた。

「いちか。君がそんな獣だったなんて。僕は幼馴染みとして、君を、
許すコトは出来ないッ」

「けだものつて。いきなり何言ってるんだ、晶？」

「——そうか。あくまでそう言う態度なら。」

ハッキリ言っただげる。いちかは隣の女子を見ていた」
「だから、それが何だっただ」

お前のそんなトコが分からん。そう顔に書いてあるぞ。僕にはい
ちかが何を言ってるのか分からない。

「隣の女子の、胸を、見ていた」

「……は？」

「——へ？」

ポカンとするいちかに、何言っただコイツと言う顔から、慌てて胸を腕で隠す女子。うん、だから胸がある娘がやると逆効果です。

「ちょ、待て。誤解だ、誤解！？俺が見てたのは胸じゃなくて、彼女全体だ！」

「胸だけじゃなくて、身体全部！？」

……そっか。彼女のコトを気に入ったのか。ゴメンね、いちか。

勘違いで恋路の邪魔をしちゃって」

「いやいや待て待て！それも誤解だッ。あー、もう。何で晶のそう言うところは変わらないんだ！？」

まさかあの超絶鈍感野郎のいちかに、好きな娘が出来るとは。あれ、それだと篝ちゃん、失恋？

——やべー……やべーっすよ！織斑先生に勝るとも劣らない殺気が窓際から……！

「ほら、落ち着け。いいか、俺が彼女を見てた理由は——」

ふむふむ。自分は授業内容が分からないのに、彼女は理解しててすごいなー、と。

あれだね、いちか。

「勘違いして申し訳ありません」

「いいよ。晶のそれは、もう慣れた」

「そうだね、僕もいちかの鈍感さには慣れた」

「……反省してないよな、お前」

いやいやまさか。いちかの中学時代の女性問題なんて、思い出してないよ。うん、全然。

にしても、篝ちゃんにはまだチャンスが残っていたか。殺気が無くなったから、本人も理解したみたいだ。でもおかしいな。殺気なんて、素人の自分が分かるハズなのに……千冬さんで慣れた？

ああ、隣の女子もゴメンね。変なコトに巻き込んでやって。

「——漫才は終わりましたの？」

第四話

「授業中に教師の話を聞かないでジロジロ女性を見ている変態に、女装して登校する変態。こんな二人がISを起動できたなんて……世も末ですわ」

金髪。僅かに先が巻いている金髪が、そこに有った。

金髪ドリル、と言うには巻きが弱いが、確かなドリル。白人特有の白い肌、青い瞳。毒舌に、お嬢様みたいな口調。

まさか、まさかこんな漫画の登場人物みたいな人が本当に居るなんて……！

「わたくしはセシリア・オルコット。イギリスの代表候補生ですわ」

「あ、ああ。織斑一夏だ。よろしくな」

「……………」

「——おい、晶」

「——え……………」

まずい。あり得ないコトが起こった感動で、話を全然聞いてなかった。目の前のお嬢様がキツイ視線で睨んできます。いちか、どうしよう。

話聞いてませんでした、さーせん。と言う視線を送ると、呆れた顔で自らを指すいちか。

よし、分かった。さすが幼馴染み。

「コイツの名前は織斑一夏。無自覚で女性を落とす、天然の女誑しだ。」

貴方もそうならない様に気を付けた方が良い」

「はあ？」

「誰が俺のコトを紹介しろと言った！？　そして誰が女誑しだ！　自分の名前を、セシリアに伝えるんだよ。相手が名乗ったのに名乗り返さないのは失礼だろ」

おおつ、そうだったのか——いやいや、違うよ。知らない人相手だから恥ずかしかったんだよ。ワンクッション挟んだのだよ。ジョークなんだよ。嘘だよ。素で間違えたんだよ。穴が有ったら入りた
いよ……。

「村崎晶、よろしく願います」

「こ……こんな二人が、何故IS学園に入学できたのか。理解できませんわ……」

頭に人差し指を当て、頭が痛いですと言っている様なポーズをとるセシリアさん。

「はあ、まあ言ってもしかたありません。

——その貴方」

頭に当てられていた指は、真っ直ぐいちかへと向けられた。外国だと、相手を指差す行為は失礼に当たらないのだろうか。

「男なので事前にISの勉強を出来なかったのはしかたありません。ですが、入学前に配られた参考書すら読んでいないとは、どう言うコトかしら？」

「ぐ……」

「あー。それ言われると反論の余地無いよね、いちか」

「確かに、な。今思うと、連絡なりなんなりして、もう一冊貰うべきだった」

あの厚さで一週間は無理だろ、と再度頂垂れるいちか。
そこに、セシリアさんは救いの手を差し伸べてきた。

「まあ、貴方も反省している様ですし。分からないコトがあれば聞きにいらっしゃい。わたくし、愚図な男にも優しく接してあげますわ。

——イギリスの代表候補生にして、入試で唯一教官を倒したエリートなのですから」

結構な毒付きだけど。

今にも、おーほっほっほっ、と高笑いしそうなエリートセシリアさん。

にしても、プライドが高そうなの言い方はお国柄なのか彼女の性格なのか。いちか、大丈夫かな？　こう言う人、あまり好きじゃないから——っていちかさん？　その何か考えてる様で、ろくでもないコトを考えてるお顔は……。

「なあ、代表候補生ってなんだ？　あと教官なら俺も倒したぞ」

「はい——？」

「いちかったら……」

盗み聞きしている中の少数の女子がずっこけ、僕は頭を抱える。
このクラス本当にノリは良いけど、ねえいちか。君のそう言うところ、僕には分からないんだ。

「いちかあ。文字通り、各国代表の候補だよ。千冬さんに成る前の、準備段階の人達」

「……あ。ああ、そう言われれば。でも、千冬姉みたいに成るってのはどうも——」

「——こんな、こんな人が教官を倒した？　わたくしと同格ですって……！」

うわ、セシリアさんが凄い顔に。千冬さんに成るのは、遠くないかもしれない。

まだ何か言いたそうなセシリアさんだが、授業開始のチャイムが鳴ったため、引き上げていった。

次の休み時間にまた来そうだよ。

「はいっ、私織斑君が良いと思います！」

三時間目は、山田先生ではなく、織斑先生の授業だった。そして授業開始早々、決め忘れたクラス代表を決めるコトに成った。簡単に言えば、クラス長を決めると。

そんなコトを忘れるなんて、千冬さんはドジッ娘だなあ。なんて考えたら、さっきのセシリアさんが聖母に見える程のキツイ視線が注がれました。

ゴメンねセシリアさん。鬼ちいゆさんに成るにはまだまだ遠いよ。

「私も織斑君が良いと思います」

先程から上がるいちかの名前。ふむ、やはり男子が珍しいからか男子押しだな。いちかの名前ばかり上がるのは、やはり千冬さんの弟だからだろう。

「私は村崎くんが良いと思いますー」

って僕もですか！？

推薦してくれたのは、いかにものほほんとした女子。袖が長くて

ダバダバに改造された制服を着ている。なんか、小動物みたいで可愛い。

推薦してくれた期待には応えたいけど……うーん。

「織斑一夏に、村崎晶。男子二人か……他には？ 自薦他薦は問わんぞ」

「俺なのか！？」

「邪魔だ、座れ」

どうやらいちかは、選ばれたのは自分では無いと思ってたらしい。いちからしいね。

「あの、先生」

手を上げて発言許可を求める。

「どうした村崎」

「推薦してくれた女子には申し訳ないのですが、辞退させてください」

「……何故だ？」

「恥ずかしいです」

「辞退は認めん」

「何故だ！？」

そ、そんな馬鹿な……！ 何故、何故辞退を認めてくれないんだ、恥ずかしいのに！？ 人見知りにとってそんな立場は厳しすぎますよ……。いちが笑うな！ 顔は見えないけど肩が揺れてるから丸分かりだぞつ。

……そうだ。ふふ、馬謖すら唸らす策、我に有り——！

「ならなら、僕はこのクラス全員を推薦します！」

『はあ！？』

「ナイス晶ッ」

任せる相棒。

お互いにビシッと親指を立て合う。いちかは前の席だから、視線は前を向いたままだけど。

ザワザワと沈黙を破り始める女子達。さすがの織斑先生もどうするか考えている様で、口を閉ざしたままだ。

「さあどうする千冬さん。早く決めないと、授業時間がどんどん無くなりますよ？ 僕の辞退を認めてくれれば、先程の言葉は取り消すのになー」

……あれ？ もしかして僕、教師に嫌われるようなコトしちゃってる？

「——成る程。そう言うコトか」

「へ？」

「声に出てたぞ、村崎」

マジですか。

あ、空気が凍ってる。視線だけ横に向けると、両隣的女子は顔面蒼白だ。見えるコトはないが、他の女子達も同じ様な状況だろう。

「教師を意図的に困らすとは……悪い生徒だ。罰を与える必要があるな」

「えっと、あの……優しくして——」

「——納得いきませんわ。ええ、納得いきません」

重苦しい空気と言葉を遮り、立ち上がって猛々しく言い放ったの

はセシリアさん。その顔は、イラついていますよーと書いてあるみたいに、分かりやすくイラついてました。

「物珍しいからと言って男をクラス代表にするなんて。素人をクラス対抗戦に出したら負けるに決まっているでしょう？」

敗北の味を、セシリア・オルコットに、このわたくしに！ 一年間味わい続けるとおっしゃるのですか！？」

怒濤の勢いで突っ走るセシリアさん。暴れ馬見たいなその姿は、それでも気品を損なっていない。むしろ優雅な中に力強さを感じて、とても綺麗に見えた。

その姿に、思うコトは一つ。

……セシリアさんのおかげで織斑先生の出席簿アタックを免れた？

「ふむ。ならばオルコット。どうしたい？」

「対戦を望みますわ。素人の彼等が、わたくし相手にどこまで喰らいついて来れるのか。もし不甲斐ない結果でしたら、わたくしがクラス代表に成りますわ」

「だそうだが、どうする？ 織斑、村崎」

「――そこまで言われて引き下がるワケないだろ。なあ、晶」

目を爛々と輝かせ、セシリアさんを見つめるいちか。うは、ヤル気満々だね。いちかはこう、ちよつと体育会系入ってるからな。男らしいとも言えるけど。

「そうだね。でも、僕は止めとくよ」

「なんですって？ 結局、怖じ気づいたのですか」

貴方にはがっかりですわー、なんて思ってそうだ。いちかもええーって顔をしないの。ちゃんと理由があるんだから。

「二対一なんてめんどくさい。男なら正々堂々一発勝負。いちかを男子代表として送り出すよ。」

代表候補生相手に、必ずいちかが勝つなんて言えない。けど、信じてる。いちかなら無様な負け方はしないだろうって。セシリアさんに喰らいついていけるって」

その言葉に、ドツと盛り上がる女性陣。

「相手を完全に信頼してる。これが、男子！」

「素敵……」

「織斑君が攻めかと思ったけど、村崎君も……ぐふふ」

なんか聞こえたけど聞こえなかった。中学の時みたいに、いちか×僕とか、いちか×五反田とか、いちか×鳳（男性化）とか、いちか×僕（女性化）なんて聞こえなかった！

「確かに相手が代表候補生だからって、二対一は男らしくないよな。任せろ、相手の度肝を抜いてやるぜ！」

「成る程……。相手を信頼して自らは何もしない。貴方の様に、あえて手を出さない方も居るんですね」

意気込むいちかに、納得したのかふむふむと頷くセシリアさん。

山田先生も興奮して納得する中、一人冷静な人物が居た。

——織斑先生だ。

「決まったな。それでは一週間後の月曜。放課後、第三アリーナで試合を行う。織斑とオルコットは用意をしておくように。」

さて、それでは授業を始めよう。どこかの馬鹿が、大切な授業時間を削ってしまったからな」

さいせん。

第五話

「寮の部屋が決まりましたよ」

本日の全授業終了と共に、頭に詰め込みすぎて机に突っ伏した放課後。教室を出てからまた戻ってきた山田先生に、そんなコトを言われた。

ん、でも。

「先生、暫くは自宅通学じゃなかったんですか？」

「僕もそう聞いてましたが」

「事情が事情なので、何とか強引に無理をして部屋割りを変更したんです。強引にし過ぎて、一人は女子と相部屋ですが」

「いちか」

「おう」

最初はグー。じゃんけん、ぽん。

僕、チヨキ。いちか、パー。

「と言うワケで、一人部屋を」

「はい。織斑くんは此方を。篠ノ之さんと同室ですよ」

あら。これは結果的に良い方向に。いちかも相手が篝ちゃんと知って気が楽になったみたいだ。あはは、まったくいちかは。幼馴染みでも女子相手にホツとするっておかしいでしょ。

山田先生から鍵を受けとると、ふと疑問が浮かんた。

「せんせー。荷物ってどうなってるんですか？ この後、家まで取

りに？」

「私が手配して既に寮の部屋に置いてある」

「ちふ、じゃなくて。織斑先生ありがとうございます」

現れた織斑先生に、いちかと一緒に一礼。

「織斑は、着替えと携帯電話の充電器が有ればいいだろう。村崎の方は、既に準備がされていた物をご両親から預かった。足りない物は休日に取りに行つてこい」

やっぱり千冬さん。凄い大雑把。いちかの荷物は、他にも漫画とかゲームとか用意してあげようと思ったんだろうな。ブラコンだから。けど整理整頓が苦手なこの人は、結局荷物を纏められなかったと。

「村崎」

「何も思つてないですよ、嘘ですけど」

あは、と笑つたら。ニタリ、と笑い返された。

「……まあ、今回は見逃してやろう。山田君、何か伝えてないコトは？」

そのあと山田先生が伝えてくれたのは、お風呂場のコトだ。大浴場は女子風呂しかないため、普段は部屋に備え付けてあるシャワーを使用するコト。週に一度だけ男子にも大浴場が使用可能である、と。

お風呂大好きいちかさんは、最初大浴場が使えないため落ち込んでいたが、週に一度だけでも使えると聞いて喜んでいた。

「はあ……」

いちかと別れ、教えられた番号が書かれている部屋に入ると、グツと体を感じていた圧力が消えた。

「やっぱり、相当堪えてたのかな。女子の視線と、知らない人に囲まれる環境に……」

ベッドの上に乗っていた荷物の入った鞆を退かし、寝転がる。うむ。柔らか、柔らか。

……シャワーを浴びて気分を変えよう。ベッドの寝心地が良すぎて寝てしまいそうだ。夕飯まだ食べてないのに。

制服は脱いでキチンとハンガーにかけ、タオルだけ持ってシャワー室へと向かった。

さすが国立と言うべきか。部屋はその辺のホテルより豪華だし、それは洗面所やシャワー室も例外じゃなかった。

さて。熱いシャワーを浴びて気分もリラックスしたところで、少し考えてみるか。

——教室でいちかが思い、千冬さんに怒られたあの問題。自分は望んでここにいるワケではない、だったか。

正直、それは理解できる。僕の場合、保護目的でIS学園に強制入学だったけど、いちかも似た様なモノだったんじゃないかな。

ある日いきなり希少な存在として世界中で有名になって、自分が望んでいない道を強制的に歩かされる。年頃の子供がそんな立場になったら反発して当たり前だ。その反発を許さないのが、千冬さんらしいけどね。

そもそも、何故こんなコトになったのか。これは、考えるまでもない。

「――」
お湯を勢いよく出す。熱いシャワーに頭からうたれ、目蓋を閉じた。

篠ノ之、東。ISの生みの親にして千冬さんの親友。そして、僕といちかがISを、インフィニット・ストラトスを動かせた原因。たぶん。

東さんと知り合いの僕達が、初めて男でISを動かせたなんて、あの人が何かやったとしか考えられない。東さんは興味の無い相手には害虫と同じ扱いしかないけど、気に入ったら物凄く構ってくるから。

僕なんて、篝ちゃんと知り合ってから何度か顔を会わせたけど最初は悉く無視。次に罵倒だ。篝ちゃんが引つ越していった数日後に、漸く仲良くなれたんだけど、仲良くなれた理由がイマイチ分からない。何でアレから仲良くなったんだろう……？

東さんを知ってる人がいたら、仲良くなったただけでも奇跡だって言うんだろうな。

「ふう」

シャワーを止めてタオルで体を拭く。大分気分もサッパリした。良い気持ちで夕飯を食べれるかな。東さんのコトは、何を言っても今更だし。

「――む。邪魔してるぞ、むらさ、き……？」

部屋に戻ると織斑先生の姿が。って、人の荷物を何勝手に漁ってるんですか。荷物を漁ってる姿を見られたからか珍しく焦ってるけど、さすがに黙っていられないよ。

「織斑先生、勝手に部屋に入るのは、まあ教師だからいいです。けど、教師だからって、生徒の荷物を勝手に漁るのは悪いコトだと思います」

仁王立ちで織斑先生に言ってやる。

「これは、アレだ。荷物検査だ。ここは女子生徒しかいなかったかな。風紀を乱す物が有ったら没収しよう、そう思っただけで見ていたのだが……見事に出てこなかった」

風紀を乱す物………うん。

「エロ本とか？」

「ストレートに言っただけ、馬鹿者」

おやおや。てっきり一撃もらうと思ったけど、今回は無かった。

「持ってきてませんよ。女子しかいない場所で持ってるのがバレたら、どんな目で見られるか……」

「それもそうか。何せ男性経験が無いのでな。男に関わるコトはサッパリだ」

「千冬さん、やっぱり彼氏いなかったんですね。ってなんかサラッと言いましたけど、恋愛の話なんて初めて聞きました」

鞆を元々置いてあった位置に戻す千冬さんの、背中を見ながら話す。

織斑家には両親がいない。理由は分からないが、いちかの物心ついた時にはいなかったらしい。

そんな環境の中、いちかの面倒を見ながら学校に通ったり働いて

いた千冬さんに、浮いた話が出てこないのも当然だろう。世界一にもなったから、変な虫も近づけなかったみたいだし。更に束さんが殺虫剤を使用していた可能性が高いです。

「子供に話さないのは当然だろう。今のは口が滑ったと思っておけ。今日のお前みたいにな」

「……あー、そうですか。そう言うコトですか。すいません、色々」と

「気にするな、私と晶は——そう。昔から知り合いだからな」

生乾きの髪を撫でられる。千冬さんに撫でられるなんて何年ぶりだろう。気持ち良い……。

ちゃんと僕やいちかのコトを見てたんだな。今日は緊張してて、知らない人が居る場所でも冗談を言ってたから、いつもと違うと思われたんだろう。あ、こいつ緊張してる、って。

だから千冬さんをからかって、軽く済ませてくれたんだ。

「用も済んだから私は行く。食堂の利用時間に遅れるなよ」

「はい」

「ああ、あとな」

僕を見つめる千冬さん。頬が薄くだが赤く色づき、瞳が揺らいでいる。その視線は気の所為か——。

「いつまで全裸でいるんだ。サッサと服を着ろ」

——気の所為ではなく、僕の下半身を見ていました。うん、チリバツ見られた。チリバツって、何言ってるの僕。バツチりって普通に言えばいいじゃん。

——ふ、服着るの忘れてたああああ!?

「千冬さんのエッチー!!」

「誰がエッチだ。エッチなのは晶だろうに。山田君の胸やお尻をジロジロと見ていたじゃないか」

バレてたー!?

「それに、若い異性が裸なんだ。見るのは当たり前だろ？」

相手が女ならお前も見ろだろ？　なんて台詞を残しながら千冬さんは去って行った。

ああ、それはそうだと思います。しかし、幼馴染みの綺麗なお姉さんに見られるのは、こう――ふにゃああああ!?

後日だけど、いちかが篝ちゃんの風呂上がりバスタオル一枚姿を見たのが分かった。

寮に入った初日にシャワーを浴びると、次に部屋に入った相手に裸を見られるのは、IS学園だとよく有るコトなのかな？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1321z/>

ISで、変な男子を一人増やしてみた。

2011年12月21日01時48分発行